

## 参考図書紹介

### ボルネオのミツバチたちーミツバチ多様性の中心地での研究の展開ー

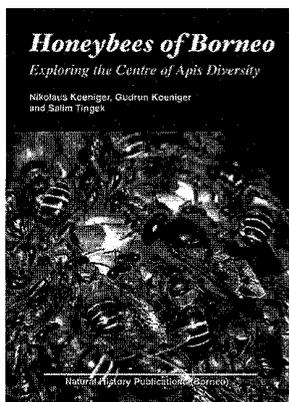
Koeniger, N., G. Koeniger and S. Tingek. 2010. Honey Bees of Borneo: Exploring the Centre of *Apis* Diversity. Natural History Publications (Borneo), Kota Kinabalu. 262 pp. ISBN978-983-812-128-6

著者のフランクフルト大学ミツバチ研究所のケーニガー教授夫妻は、アジアのミツバチに20年以上にわたり目を向けてきた研究者である。またマレーシア、サバ州テノムにある農業研究ステーションのティンゲック博士は、ケーニガー夫妻の良き共同研究者であり、この3人によるアジアのミツバチ研究の集大成といえるべき書籍が刊行された。

現在世界には9種のミツバチが知られ、元来ヨーロッパ・アフリカを原産とするセイヨウミツバチはその中の一種で、養蜂種として利用されていると共に最も研究されている動物の一つとされている。残る8種はすべてアジアに生息している。アジアのミツバチは歴史的に古くから人々に知られ、アジア各地で伝統養蜂が営まれ利用されているが、科学的分野での研究はまだ充分ではないと言える。

ボルネオ島にはこの8種のミツバチの内、5種が生息している。その5種は新種として発見されたサバ州の山岳地域のハチであるキナバルヤマミツバチ、レッドビーと呼ばれるサバミツバチ、ボルネオに広範囲に分布しているトウヨウミツバチ、そして野外の開放空間に単葉の巣板を作るオオミツバチとクロコミツバチである。

本書の表紙には、交尾飛行のために巣板の上部に現れたクロコミツバチ雄蜂があしらわれている。第1章では「なぜボルネオでのミツバチ研究か」と題して上記5種ミツバチについて解説している。特に高木に営巣するオオミツバチの観察は、登山家さながらにロープを使い巣に近づく手法は圧巻である。250枚に及ぶカラ



出版記念に勢揃いした著者(左がケーニガー夫妻)

一写真や分かりやすい図により15章で構成されている。「ミツバチの配偶行動と生殖」の章は、著者らによって、次々に明らかにされたミツバチ種間で飛行範囲を変えた樹冠部の交尾場所が説明されている。私は2003年2月、ケーニガー夫妻から誘いを受け、オオミツバチ交尾場所での雄蜂捕獲実験に参加することができた。

ボルネオに生息している5種のミツバチは、それぞれの行動パターンを持つ種が共存している。そのためそれらの種をまじかで見ると観察し、違いを研究する上で最も適した場所なのである。

筆者たちはこれらのミツバチについて、行動の違いや進化の過程、ミツバチたちの環境への驚くべき適応力など、それぞれの種の固有の変化などを観察し続けてきた。

地球上の生物が失われていく警告を鑑み、国連は今年2010年を国際生物多様性の年と宣言している。Bee for Developmentの主催者であるニコラ・ブラッドベア博士が序文に寄せているように、現在、どれだけ多くの種が近い将来この地球上から絶滅していくかという恐ろしい予見に直面している中で、アジアのミツバチの多様性に注目した素晴らしい本が、2010年という特別な年に出版されたことは大きな意義があると思われる。(吉田忠晴)